

スペイン語における使役構文の統語構造について

La estructura sintáctica de las construcciones causativas en español

藤田 健

Takeshi FUJITA

0. はじめに

いわゆる使役構文は言語によっていくつかのタイプの統語構造によって表現される現象で、統語論・形態論において様々な研究の対象となってきた。多くの興味深い言語事実の発見によって、生成文法の領域においてもその発展に大きな貢献をなした統語現象の一つであると言えよう。ロマンス諸語においては、使役構文は、他の多くの印欧語族の言語と同様、使役動詞と不定詞からなる構造が一般的である。この中で、スペイン語においては、フランス語・イタリア語に観察される主語と不定詞の倒置がなされるタイプの使役構文の他に、倒置が関与しない構文も存在することが知られている。本稿は、このスペイン語において観察される2種類の使役構文の統語構造及びその統語的特性を生成文法の枠組で分析し、両構文の関係を明らかにすることを目的とする。

1. スペイン語における使役構文の統語的特性

本節では、本稿が考察の対象とするスペイン語の使役動詞“hacer”を用いる使役構文の統語的特性を、フランス語・イタリア語の対応する構文と対比しながら観察していく。

1. 1. 使役構文における被使役者名詞句の統語的分布

スペイン語における使役構文は、フランス語・イタリア語と同じく、使役動詞“hacer”と、補文として選択される不定詞節とによって構成される。しかし、スペイン語は *causee* の統語的分布に関して両言語と異なっている。フランス語・イタリア語では *causee* が不定詞句に後続する語順、いわゆる倒置が生ずる語順（以下倒置構文）のみが容認されるのに対し、スペイン語においては倒置構文の他に先行する語順、すなわち英語における例外的格付与構文と同じ語順（以下非倒置構文）が容認される¹。(1)はスペイン語における倒置構文、(2)は非倒置構文の例である²。(3)、(4)はそれぞれフランス語、イタリア語の例で、いずれも倒置構文のみが文法的となる。

(1) a. Juan hizo funcionar (a) la radio.

b. Juan hizo abrir la puerta a/por Pedro.

(Torrego(1998))

(2) a. Juan hizo *(a) la radio funcionar.

b. Juan hizo a Pedro abrir la puerta.

(Torrego(1998))

(3) a. Il a fait partir son amie.

b. Elle fera lire ce livre à Jean.

c. *Il a fait son amie partir.

d. * Elle fera Jean lire ce livre.

(Kayne(1977))

(4) a. Maria ha fatto lavorare Giovanni.

b. Maria fa riparare la macchina a Giovanni.

c. *Maria ha fatto Giovanni lavorare.

d. *Maria fa Giovanni riparare la macchina.

(Burzio(1986))

(1b)に示されるように、倒置構文においては causee は前置詞“a”もしくは“por”によって標示されねばならない³。

スペイン語に特有の非倒置構文において特徴的なのは、causee が[+animate]でなければならないという意味的選択制限が存在するということである⁴。倒置構文の場合には、このような意味的選択制限は観察されない。

(5) a. *La guerra hizo (a) los precios subir.

b. La guerra hizo subir los precios.

(Torrego(1998))

従って、両構文の統語構造を考察する上で、単なる語順の相違だけではなく、このような意味上の制約の有無をも考慮に入れねばならない。

両構文において causee を代名詞化した場合には、いずれの場合も人称代名詞が使役動詞に前接する形で生起する。

(6) a. Juan hizo a Pedro leer estos libros.

b. Juan hizo leer estos libros a Pedro.

c. Juan le hizo leer estos libros.

(Trevisio(1991))

このように、causee が代名詞化された場合には、両構文に表層における差異は観察されないことになる。causee が使役動詞にクリティック化されるという事実は、いずれの構文においても causee が統語的に使役動詞と関係付けられていることを示している。

1. 2. 不定詞の直接目的語の代名詞化

ここでは、使役動詞の補文である不定詞節が他動詞文である場合に、不定詞の直接目的語の代名詞化がどのように行われるかを観察する。不定詞の直接目的語が代名詞化される場合、代名詞クリティックの統語的分布に関して倒置構文と非倒置構文とで差異が観察される。(7)に示されるように倒置構文では代名詞クリティックが不定詞に後続する語順と使役動詞に前接する語順のいずれもが文法的であるのに対し、(8)に示されるように非倒置構文では不定詞に後続する語順のみが可能であるという点である。

(7) a. Pedro hizo repararla por Juan.

b. Hizo construirla a/por Leonardo.

c. Pedro la hizo reparar por Juan.

d. La hizo construir a/por Leonardo.

(8) a. Hizo a Leonardo construirla.

b. *La hizo a Leonardo construir.

(Treviño(1991))

この現象は、両構文において単なる表層における語順にとどまらない、統語的特性に関する相違が存在することを示唆している。

2. 先行研究

スペイン語の使役構文に関する先行研究はいくつか存在するが、使役動詞の不定詞補文を S(IP)とする考え方と VP とする考え方に大別される。本節では、この二つの説についてそれぞれの概略と問題点を見ていく。

2. 1. S(IP)補文説

使役動詞の不定詞補文が S(IP)であるとする代表的な研究として、Jaeggli(1982)が挙げられる。Jaeggli は、倒置構文において補文の動詞が causee に先行するのは、補文の VP が主文の V に繰り上がるためであるとする。(9a)が基底の構造、(9b)が倒置構文の構造を示す。

(9) a. [_S NP [_{VP} V(hacer) [_S NP [_{VP} [_{V'} V NP] (PP)]]]]

b. [_S NP [_{VP} [_{V'} V(hacer) [_{VP} [_{V'} V NP] (PP)]_i [_S NP t_i]]]]

この分析で最も問題となるのは、補文の VP が主文の V に付加される理論的動機付けが提示されていないという点である。原理とパラメーターのアプローチ以降の生成文法においては、移動は何らかの動機がない限り認可されないという強い制約が課せられている。また、スペイン語に存在する使役の非倒置構文の例を考察対象にしていないという点で、十分な検証を経ているとは言い難い。

更に、(10)のように補文の自動詞が補語を伴う例がどのように派生されるかが説明されていない。

(10) María hizo salir a José de la habitación.

仮に(9a)の構造を(10)の例に適用するとすると、(10)では補文の VP ではなく V が移動することになる。すると、補文の動詞が自動詞の場合には V が移動し、他動詞の場合には VP が移動するということになり、簡潔な説明であるとは言えない。

2. 2. VP 補文説

使役構文の不定詞補文が VP であるとする分析の代表的なものとして、Treviño(1991)と Torregó(1998)が挙げられる。Treviño は、非倒置構文の場合には causee が補文の VP 指定部に主語として生成されるのに対して、倒置構文では causee が non-canonical な主語として動詞に後続する位置に生成され PP として具現化されるとする。この場合、VP 指定部は空となる。非倒置構文の構造は(11a)、倒置構文の構造は(11b)に示される。

(11) a. [_{VP} V(hacer) [_{VP} NP [_{V'} ...]]]

b. [_{VP} V(hacer) [_{VP} e [_{V'} ... NP...]]]

(11a)では causee が主文の動詞“hacer”から構造格を付与されるのに対し、(11b)では causee の格が内在格であると主張する。この分析では、倒置構文の語順が基底生成の段階で生じると考えるので、Jaeggli の分析で問題となる移動の動機付けの問題は生じない。

しかし、この分析には別の問題点が潜んでいる。それは、(11b)で causee の内在格がどのように認可されるかという点である。統語的位置関係によってのみ認可される構造格と異なり、内在格はθ役割付与を条件として与えられるものである。しかし、(1b)で既に見たように、倒置構文においては補文の動詞が他動詞である場合、causee の標示が2種類の前置詞によって可能となる。

(1) b. Juan hizo abrir la puerta a/por Pedro.

この2つの前置詞の標示する名詞句がもつθ役割が同じであるとは考えにくい。特に前置詞“por”は以下に示されるように受動文において動作主を典型的に標示する前置詞である。

(12) La respuesta fue escrita por Manuel.

このような前置詞で標示される名詞句が使役動詞によってθ役割を付与されると考えることは極めて難しいと言えよう。

更に、既に観察したように、causee にθ役割に関わる意味的制約が見られるのは(11a)に該当する構文である。

(5) a. *La guerra hizo (a) los precios subir.

b. La guerra hizo subir los precios.

この事実は、むしろ causee が特定のθ役割を付与されているのは非倒置構文においてであることを強く示唆している。

Torrego(1998)は、使役構文について以下の構造を提案する。

(13) [_{VP} v [_{VP} DP(causee) [_{V'} V(hacer) [_{VP} V DP(object)]]]]

この分析の特徴は、causee が主動詞である“hacer”の項として主節の動詞句内に生成されるという点である。このように設定することによって、causee に対する意味的制約を構造的に説明することを試みている。

この分析の問題点は、非倒置構文と倒置構文のいずれにも共通の構造を仮定しているため、なぜ両者の語順の違いが生じるかが明示的に説明されていない点である。causee が前置詞“por”を伴う場合には補文の動詞が主文の動詞の位置まで繰り上がり、“hacer”と複合動詞を形成する構造を仮定していることから、上記の問題の解決案として causee が対格で生起する場合も同じ構造を仮定することが考えられる。しかし、なぜ補文の動詞が主文まで繰り上がる構造と元の位置に留まったままの構造の2種類が許されるのかを理論的に説明することが困難となるであろう。

3. 使役構文の構造と causee の格照合

本節では、倒置構文と非倒置構文とに分け、それぞれの構文の統語構造を考察する。その構造を基に、causee 及び補文動詞である不定詞の直接目的語の格照合がどのように行われるかを分析する。

3. 1. 倒置構文

本稿では、スペイン語の倒置使役構文に対しては、Fujita(1999)において提案されたフランス語の当該構文に対する分析が適用されると考え、(14), (15)の構造を仮定する。

(14) “hacer”は vP(VP)節のみを選択する。補文の動詞は繰上げによって“hacer”と複合動詞を形成する。

(15) a. 補文の動詞が自動詞である場合、補文の主語は通常他動詞と同様、LF で主文の vP 指定部において格照合される。

b. 補文の動詞が他動詞である場合、二つのオプションが可能である。

i) 補文の主語が overt syntax で主文の v_DP 指定部に移動し、前置詞 a によって与格を付与される。

ii) 補文の主語が降格され、前置詞句として生起する。この前置詞句の主要部は動作主の θ 役割を付与する“por”である。

すなわち、使役構文の補文は Treviño(1991), Torrego(1998)と同様動詞句であると考え、補文の動詞の繰上げによって複合動詞が形成され、格照合に関する素性も統一される。従って、補文の vP は Chomsky(2001)での phase を構成しないことになる。また、与格を標示する前置詞“a”が生起する文においては、(16)のように考える。

(16) 与格名詞句の格照合は v_DP 指定部において行われる。

v_D とは与格名詞句を格照合する動詞で、対格名詞句を格照合する v と区別される。

この仮定をもとに、具体的な派生を見ていく。補文の動詞が他動詞の場合、不定詞の目的語は複合動詞の vP 指定部で格照合されねばならない。このため、causee は対格の照合が不可能となるので与格として生起し、主文の v_DP 指定部に移動し、与格を格照合されねばならない。これは、通常の3項動詞における格照合に類似するものである。(1a)で causee が対格で生起する例の構造が(17a)、(1a)で causee が与格で生起する例の構造が(17b)、(1b)で causee が与格で生起する例の構造が(17c)、(1b)で causee が前置詞“por”によって標示される例の構造が(17d)である。

(1) a. Juan hizo funcionar (a) la radio.

b. Juan hizo abrir la puerta a/por Pedro.

(17) a. [_{TP} DP_i [_T [_T V₁ V₁] [_{VP} t_i ... [_{VP} [_V t_{V1} V₂ V₂] [_{VP} DP ... [_{VP} t_{V2}]]]]]]]

b. [_{TP} DP_i [_T [_T V₁ V₁] [_{vDP} t_i ... [_{VP} [_V t_{V1} V₂ V₂] [_{VP} DP_D ... [_{VP} t_{V2}]]]]]]]

c. [_{TP} DP_i [_T [_T V₁ V₁ v_D] [_{vDP} ... [_{VP} t_i ... [_{VP} [_V t_{V1} V₂ V₂] [_{VP} t_j ... [_{VP} t_{V2} DP]]]] DP_{Dj}]]]

d. [_{TP} DP_i [_T [_T V₁ V₁] [_{VP} t_i ... [_{VP} [_V t_{V1} V₂] [_{VP} [_V t_{V2} DP] [_{PP} por DP]]]]]]]

causee の格標示を考える上で示唆的な現象が存在する。(18b)の例に示されるように、不定詞の直接目的語が人間で前置詞“a”によって標示される場合、倒置構文が容認不可能となるのである。同様の事実は、(18c)の3項動詞の構文においても観察される。

(18) a. Hicieron a los soldados describir al general.

b. * Hicieron describir al general a los soldados.

c. * Describimos al general a los soldados.

(Torrego(1998))

これは、スペイン語の対格標示の複雑さに起因している。既に言及したように、スペイン語では人間の直接目的語は前置詞“a”によって標示される場合が多い。直接目的語の与格標示をどのように分析するかには様々な考え方があるが、本稿では既に(16)で提案したようにこの直接目的語の与格標示も構造格として通常の与格と同じように主要部 v_D によって格照合されると考える。このように考えると、(18b)の例では与格として格照合を受けねばならない名詞句が二つ存在することになる。一つの動詞句には一つの v_D しか存在しないため、一つの与格形名詞句しか照合できずに非文となる。(18b)の構造を(19)に示す。

(19) * $[_{TP} DP_i [_T [_T V_1 v_D] [_{vop} [vop' t_i \dots [VP [v t_{V1} V_2 v_2] [_{VP} t_j \dots [VP t_{V2} DP_D]]]]]] DP_{Dj}]]$

(18c)の非文法性も全く同様に説明される。これに対して不定詞の直接目的語が非人間である場合、与格形名詞句と対格形名詞句が一つずつ生起することになる。

(6) b. Juan hizo leer estos libros a Pedro.

この文では、与格を照合する v_D と対格を照合する v の両方が生起することになる。それぞれの名詞句は別の主要部によって格照合を受けることになり、文法的となる。(6b)の構造を(20)に示す。

(20) $[_{TP} DP_i [_T [_T V_1 v_1 v_D] [_{vop} \dots [VP t_i \dots [VP [v t_{V1} V_2 v_2] [_{VP} t_j \dots [VP t_{V2} DP]]]]]] DP_{Dj}]]$

3. 2. 非倒置構文

非倒置構文については、倒置構文とは異なり、“hacer”と補文動詞が統語的に独立していると考えられる。つまり、英語の例外的格付与構文と基底においては同じ構造となる。既に観察したように、非倒置構文においては causee に対して意味的制約が課せられる。

(5) a. *La guerra hizo (a) los precios subir.

b. La guerra hizo subir los precios.

このような意味役割に関する制約は、何らかの形で統語的な説明を要するものである。本稿では、補文の主語が本来担っている補文の動詞の行為者としての θ 役割の他に、主文の動詞句内で causee としての θ 役割を合成的に与えられるためにこのような意味的制約が生ずると考える。非倒置構文の構造をまとめると(21)のようになる。

(21) “hacer”は $vP(VP)$ を選択し、義務的に v_D と共起する。補文の主語は主文の $v_D P$ 指定部に移動し、合成的に θ 役割を受け、主文の動詞句で格照合を受ける。

この仮定に基づいて、(2b)の統語構造は(22)に示される。

(2) b. Juan hizo a Pedro abrir la puerta.

(22) [TP DP_i [T_i [V₁ V_D] [_{VP} DP_{Dj} [_{VP} t_i ... [_{VP} t_{v1} [_V t_j [_v V₂ V₂] [_{VP} t_{v2} DP]]]]]]]]]]]

causee は補文の主語として vP 指定部の位置に生成され、主文の vP 指定部に移動して合成的に hacer より θ 役割を付与される。このため causee には“hacer”による意味的選択制限がかかり、非生物であっても前置詞 a が必要となる。非倒置構文では、causee が義務的に与格で標示されるので、causee の格照合は“hacer”を主要部とする VP 殻構造を形成する v_D によってなされる。倒置構文と異なり、“hacer”は統語的複合動詞を形成するという特性をもたないため、補文の動詞が基底の位置にとどまっている。従って、不定詞は統語的に自立した機能を保持するため、独自に目的語の格照合を行うことができ、目的語は補文内で格照合されることになる。

4. 不定詞の直接目的語のクリティック化

本節では、前節での議論をもとに使役構文における不定詞の直接目的語が代名詞クリティックとして生起する場合の構造を考察することによって、その分布を説明する。筆者は Fujita(1999)において、フランス語の代名詞クリティックには通常の名詞句と異なる認可条件が課されることを提案した。これを(23)に示す。

(23) クリティックは、顕在構造において、(a) 格照合し、(b) 動詞要素と統語的複合動詞を形成しなければならない。

更に藤田(2004)では、この認可条件は代名詞クリティックの形態統語的特性に関わるものであり、フランス語のみならずロマンス諸語において観察される代名詞クリティック一般に適用される普遍的なものであると主張した。以下では、(23)の認可条件をスペイン語の代名詞クリティックに適用することによって、本稿が分析対象とする直接目的語代名詞クリティックの分布が簡潔に説明されることを示していく。

4. 1. 倒置構文

倒置構文において直接目的語代名詞クリティックが生起する場合、クリティックが補文不定詞に付加している文と主文の動詞に付加している文のいずれも文法的である。

(7) b. Hizo construirla a/por Leonardo.

d. La hizo construir a/por Leonardo.

この二つの文は、構造上許容される二つのオプションに対応するものである。クリティックが不定詞に後接する(7b)では、クリティックが補文の V に編入した後に、V との一致によって格照合がなされるものである⁵。(24a)に(7b)の causee が与格で生起する例の構造、(24b)に(7b)の causee が前置詞“por”によって標示される例の構造をそれぞれ示す。

(24) a. [_{TP} DP_i [_T [_T V₁ V₁ V_D] [_{vDP} ... [_{vP} t_i ... [_{vP} [_v t_{v1} V₂ c_k v₂] [_{vP} t_j ... [_{vP} t_{v2} t_k]]]]]] DP_{Dj}]]]

b. [_{TP} DP_i [_T [_T V₁ V₁] [_{vP} t_i ... [_{vP} [_v t_{v1} V₂ c_k] [_{vP} [_v t_{v2} t_k] [_{PP} por DP]]]]]]]

クリティックが主文の動詞に前接する(7d)では、クリティックが複合動詞の vP 指定部で格照合を受けた後、複合動詞に編入するという派生を経る。(25a)に(7d)の causee が与格で生起する例の構造、(25b)に(7d)の causee が前置詞“por”によって標示される例の構造をそれぞれ示す。

(25) a. [_{TP} DP_i [_T [_T c_k V₁ V₁ V_D] [_{vDP} ... [_{vP} ... t_i [_v ... [_{vP} [_v t_{v1} V₂ v₂] [_{vP} t_j ... [_{vP} t_{v2} t_k]]]]]] DP_{Dj}]]]

b. [_{TP} DP_i [_T [_T c_k V₁ V₁] [_{vP} ... t_i ... [_{vP} [_v t_{v1} V₂] [_{vP} [_v t_{v2} t_k] [_{PP} por DP]]]]]]]

このように、クリティックの位置が異なる二つの語順がスペイン語の使役構文において可能なのは、クリティックの格照合に関してスペイン語では2つの可能性が許容されるためであると説明できる。

4. 2. 非倒置構文

非倒置構文の場合、倒置構文とは異なり、直接目的語クリティックは不定詞に後接せねばならず、主文の定動詞に前接した文は非文となる。

(8) a. Hizo a Leonardo construirla.

b. *La hizo a Leonardo construir.

このような倒置構文との分布の差は何に起因するのであろうか。まず確認しておかねばならないのは、クリティックが補文不定詞に後続する(8a)と倒置構文において対応関係にある(7b)、クリティックが主文の定動詞に前接する(8b)と対応する(7d)では、クリティックに関する統語的派生は同じであるはずであるということである。すなわち、(8a)では、倒置構文である(7b)と同様、クリティックが補文の V に編入する。(26)にその構造を示す。

(26) [_{TP} DP_i [_T [_T V₁ V_D] [_{vDP} DP_{Dj} [_{vP} t_i ... [_{vP} t_{v1} [_{vP} t_j [_v V₂ c_k v₂] [_{vP} t_{v2} t_k]]]]]]]]]

この派生では、補文の V に編入されたクリティックの格照合が v との主要部一致によって問題なく行われる⁶。(7b)の場合と同様、何ら原理に抵触しないものであるので文法的となる。

次に、非文である(8b)について考えよう。この例は、(27)が文法的であると対照をなす。

(27) José lo puede hacer.

藤田(2004)では、(27)の文では、補文不定詞である他動詞が本来もっている格照合能力が主要部一致によって主文の動詞へと継承されると分析した。従って、直接目的語クリティックは補文ではなく主文の vP で格照合されることになる。では、(27)と非文となる(8b)との違いは何であろうか。本稿では、(8b)における causee の存在がその原因であると考えられる。この causee は与格で生起するものの、受益者等の間接目的語が本来担うべき意味役割をもつ名詞句を標示するという本来の与格名詞句とは性質を異にするものである。既に述べたように、この与格は人間を表す直接目的語を標示していると捉えられるべきもので、他言語では対格に対応する格標示であると言える。このことから、“poder”等の動詞とは異なり、“hacer”は既に対格に対応する causee の格を格照合するという機能を担っているため、補

文の他動詞から別の名詞句の格照合能力を受け継ぐということが不可能となる。従って、(8b)では直接目的語クリティックが主文の vP で格照合されないために非文となると説明される⁷。すなわち、“hacer”の場合、(8a)での複合動詞形成という手続きを経ない限り補文の直接目的語が主文の vP で格照合され得ないということになる。

このように考えると、倒置構文と非倒置構文に見られる直接目的語クリティックの分布の差は、統語的複合動詞が形成されるか否かという統語構造上の差異に起因すると結論付けられる。

5. 結論

以上の分析から、スペイン語において観察される倒置構文と非倒置構文の統語構造上の相違点は、i) 倒置構文においては使役動詞と補文の動詞が統語的複合動詞を形成するのに対し、非倒置構文においては両動詞が統語的に独立している、ii) 非倒置構文においては補文の主語が v_D によって義務的に意味役割を与えられるのに対して、倒置構文では補文の意味特性に応じて意味役割が決定される、という2点に集約される。これ以外の点では、両構文は同じ統語的性質をもつと結論付けられる。以上の分析は、当該構文における直接目的語代名詞クリティックの分布も簡潔に説明できるものである。

スペイン語は使役動詞“hacer”が統語的複合動詞を形成しない可能性を許容するという点で、フランス語やイタリア語と対照をなしている。このような使役動詞の特性が、スペイン語の他の構文において観察される統語現象とどのように関連付けられるかを明らかにすることが今後の課題となろう。

註

¹ Bosque and Demonte (1999)によると、倒置構文は全ての話者にとって容認されるが、非倒置構文は話者によっては容認されない。

a. Hizo a los contribuyentes pagar demasiados impuestos.

b. Hizo a los niños trabajar duramente.

また、容認する話者の場合でも、補文の動詞が補語や修飾要素を伴う場合に限られ、自動詞単独の場合には容認されないという。

c. *Hicieron al oso bailar.

このように非倒置構文の容認度が低い話者にとっては、使役動詞の hacer は不定詞と複合動詞を形成する構文のみが認められ、非倒置構文が容認されるのは補文の動詞句が外置された構造をもつためであると考えられる。

これに対して、(2a)に見られるように Torregó (1998)は動詞が補語を伴わない場合でも非倒置構文が可能であると判断している。本稿ではこの判断に基づき、非倒置構文が倒置構文から重い要素の移動によって派生されるという関係にあるのではなく、両構文が基底において区別される構文であるという立場を取る。

² 査読委員から、倒置構文において動詞句が長い要素を含んでいる場合には容認度が下がるのはなぜかとの指摘を受けた。この事実は、長い要素の後に短い要素を置くという語順配列が機能的に好ましくないという PF レベルの制約によるものと考えられる。

³ 査読委員から、causee が“por”によって標示される場合及び省略される場合に受身の解釈が出るとの指摘を受けた。この事実は、不定詞節において受動文と同様に causee が項ではなく付加詞の位置を占めており、項でないが故に省略が可能であることによると分析できる。フランス語等においても同様の分析が可能であるが、詳しくは Fujita (1999)を参照されたい。また、causee を標示する“a”に関する歴史的経緯についても指摘を受けたが、本稿の射程を越える問題なので今後の検討課題としたい。

⁴ (2a)の例では causee が“la radio”となっており一見 animate でないように思われるが、この文では“la radio”が“funcionar”という動詞が表す行為の主体であると解釈されるので、広義での animate であると捉えることができる。

⁵ この語順はフランス語では許容されないものである。これはスペイン語とフランス語で、不定詞のもつ格照合

能力が異なるためであると説明される。詳しくは藤田(2004)を参照されたい。

⁶ この格照合は補文不定詞の v と主文の T が主要部一致をすることによって可能となる。詳しくは藤田(2004)を参照されたい。

⁷ (8b)では補文の vP 指定部で格照合を受けるという可能性も排除される。その理由は、スペイン語の不定詞は格照合能力を有しているもののそれが不完全であり、不定詞単独ではその能力を具現化できないためであると藤田(2004)で議論した。この分析は、次の文が非文であることも説明する。

*José puede lo hacer.

参考文献

- Burzio, Luigi (1986) *Italian Syntax—A Government-Binding Approach—*, D. Reidel Publishing Company, Dordrecht.
- Bosque, Ignacio and Violeta Demonte (1999), *Gramática Descriptiva de la Lengua Española 2*, Espasa, Madrid.
- Chomsky, Noam (2000), “Minimalist Inquiries: The Framework”, In Roger Martin et al.(eds.) *Step by Step*, The MIT Press, Cambridge.
- _____ (2001), “Derivation by Phase”, In Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, The MIT Press, Cambridge.
- Franco, Jon (1991) “Spanish Object Clitics as Verbal Agreement Morphemes”, In Jonathan Bobaljik and Tony Bures (eds.), *MIT Working Papers in Linguistics 14*.
- Fujita, Takeshi (1999), “Les pronoms clitiques non-réfléchis en français”, 『言語研究』第 115 号, pp.7-49.
- Goodall, Grant (1986) “Case, Clitics, and Lexical NP’s in Romance Causatives”, In Carol Neidle and Rafael A. Nunez Cedeno (eds.), *Studies in Romance Languages*, Foris Publications, Dordrecht.
- Guasti, Maria Teresa (1997) “Romance Causatives”, In Liliane Haegeman (ed.), *The New Comparative Syntax*, Longman, New York.
- Jaeggli, Osvaldo (1982) *Topics in Romance Syntax*, Foris Publication, Dordrecht.
- Kayne, Richard S.(1977), *Syntaxe du français*, Seuil, Paris.
- _____ (1991) “Romance Clitics, Verb Movement, and PRO”, *Linguistic Inquiry* 22, pp.647-686.
- Rosen, Sara Thomas (1989) “The Argument Structure and Phrasal Configuration of Romance Causatives”, In *MIT Working Papers in Linguistics* Vol.11, pp.212-227.
- Torrego, Esther (1998), *The Dependencies of Objects*, The MIT Press, Cambridge.
- Treviño, Esthela (1991), “Subjects in Spanish Causative Construction”, In Dieter Wanner and Douglas A. Kibbee (ed.), *New Analyses in Romance Linguistics*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.
- Uriagereka, Juan (1995) “Aspects of the Syntax of Clitic Placement in Western Romance”, *Linguistic Inquiry* 26, pp.79-123.
- Zubizarreta, Maria Luisa (1985) “The Relation between Morphophonology and Morphosyntax: The Case of Romance Causatives”, *Linguistic Inquiry* 16, pp.247-289.
- 藤田 健 (2004), 「ロマンス諸語における不定詞節内の代名詞クリティックの格照合」, 『北海道大学文学研究科紀要』第 112 号, pp.105-134.